

小寺聡編「改訂版、倫理用語集」山川出版社 2009年3月20日刊発行を読む

まえがき

1. 「私たちはどこから来たのか、私たちは何者なのか、私たちはどこへ行くのか」。これは、フランスの画家ポール＝ゴーギャンがみずからの絵に書きつけた言葉です。私たちは青年期に、精神の成長にともなって、それまであたりまえのように過ごしてきた人生にあらためて問いかけ、自分は何者なのか、自分が生きることにはどのような意味や目的があるのかと考え始めます。このように、人生の不思議さにめざめ、生きることの意味や目的に思い悩むことは、青年の精神の成熟のあかしであり、青年の知的な誠実さのあらわれです。
2. 高等学校の公民科の科目「倫理」は、人生にめざめた青年が、先人たちが残したさまざまな思想に触れ、また、現代社会が直面する倫理的課題に取り組むことによって、人間として生きることの意味や目的を探求する場となるものです。
3. 「倫理」の教科書には、倫理をはじめ、哲学・宗教・芸術・社会科学・心理学などの分野から、人類の知恵ともいえるべきさまざまな思想が紹介されています。本書は、高等学校のすべての「倫理」の教科書を調査し、学習に必要と思われる用語を収集して、わかりやすく、ていねいに解説したものです。また、代表的な思想家の生涯と思想も紹介しています。本書を利用しながら、「倫理」を学ぶことによって、先人の残した遺産ともいえるべき思想の全体像を正しく理解し、それをヒントに自己の人生への主体的な思索を深めることができます。また、高校生のみならず、一般の人の人生観や思想的な教養を深めるためにも役立ちます。
4. 本書の編集・執筆は、全体の編集を小寺聡が行い、執筆には小寺の他に荒井良夫・小泉博明・三森和哉の諸先生が行い、また監修を濱井修先生(東京大学名誉教授)にお願いしました。
5. 本書が「倫理」を学んで、人生を誠実に生きようとする人たちへの、よき道案内となることを期待します。

[コメント]

多くの高等学校で「倫理」が教えられなくなって久しい。フランスでは高校の最終学年で学習する「哲学」が中等教育で最も重要視され、高等教育の前提となっているのに、何としたことかと長年思っていたので本書の刊行は有難い。多くの高等学校で「倫理」を学習する機会が与えられることを切望する。

